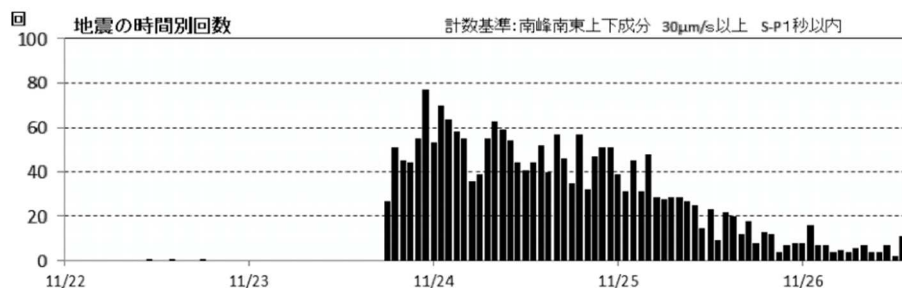




焼岳の続報

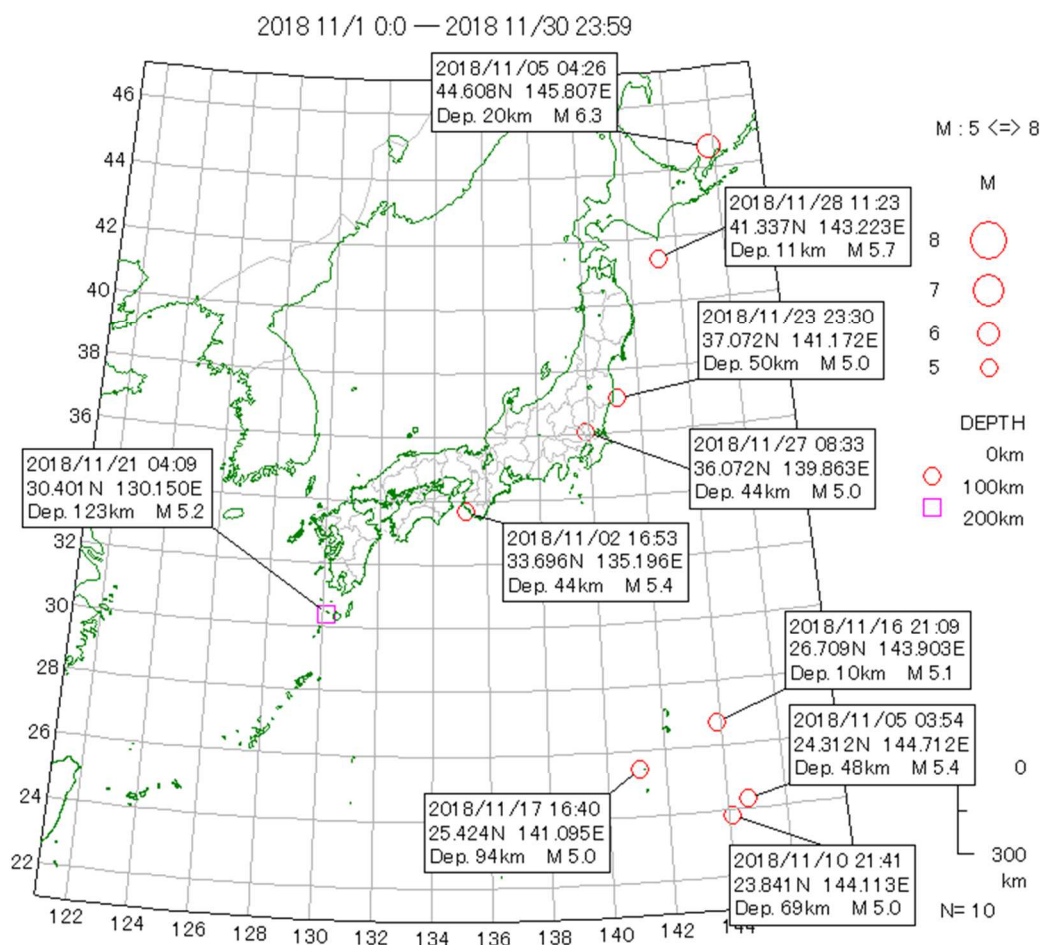
11月23日18時過ぎから、長野県と岐阜県にまたがる北アルプスの焼岳で火山性地震が急増した事を報告させて頂きましたが、活動は現在収束に向かっています。山体の膨張も観測されておらず、現時点で噴火の可能性は極めて小さいと考えられています。

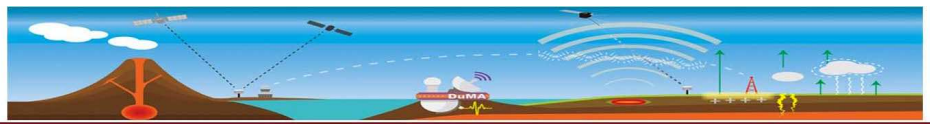


気象庁が発表した、やや大きな地震の時間別発生。活動は収束に向かっている。

11月の地震活動概観

2018年11月の地震活動で最も顕著だったのは5日に国後島近くで発生したマグニチュード6.3の地震でした(速報値では6.2)。11月にマグニチュード5を超える地震は10個発生しました。小笠原や硫黄島近海でそのうちの4個が発生しており、少しこの地域の地震活動が活発であったと言えます。





11月5日の国後島近傍の地震(M6.3)は、エネルギーとしては2018年6月18日に発生した大阪北部地震(M6.1)の2倍のエネルギーを持っています(マグニチュードが0.2違うと、エネルギーは2倍)。

被害が大きくなるかは、まさに地震がどこで発生したかに大きく依存します。都市部ではマグニチュード6で被害地震となる事がありますが、このように海域で発生すると被害地震となりません。

実は大阪北部地震は地震規模の割に被害が多くみられたかなり珍しい地震でした。この地震ではブロック塀の倒壊が大きな話題となった事をご記憶されている方も多いと思います。

この地震を受けて、文科省では今年度・来年度に学校のブロック塀の置き換えに集中的な予算配分がなされたと聞いています。

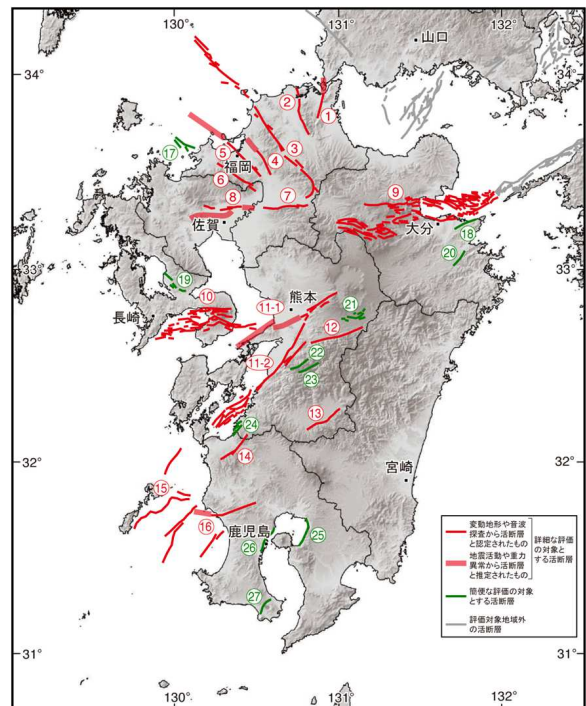


日本列島陸域の地下天気図®

10月22日のニュースレターに引き続き、日本列島陸域に特化した地下天気図をお示しします。次のページにお示しする地下天気図は10月19日と11月30日時点のLタイプをお示しします(Mタイプもほとんど同じパターンを示しています)。

この解析で最も気になる異常は九州北方の異常です。この九州北方の異常は比較的長期間観測されております。九州北部(特に福岡県)では、現在、比較的粒のそろった地震の発生が多く、中長期的にはこれは内陸地震の前兆的な変化と考えられる地震活動です。そしてこの地域には①小倉東断層、②福智山断層帯、③西山断層帯といった活断層帯が位置しています。

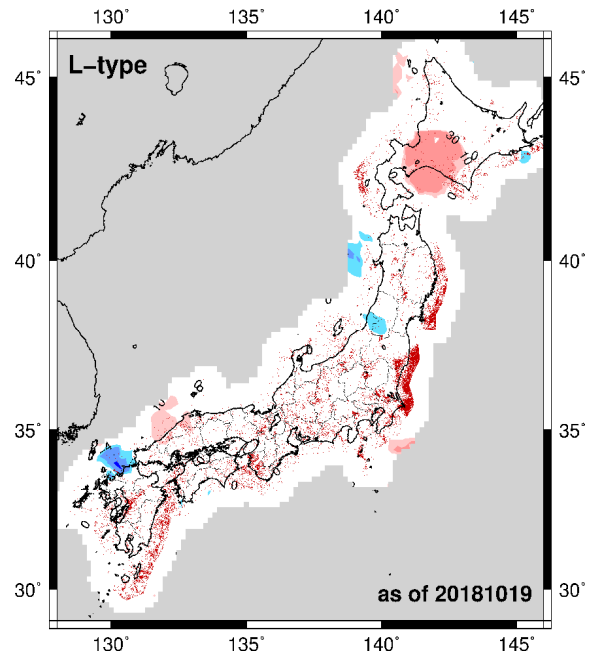
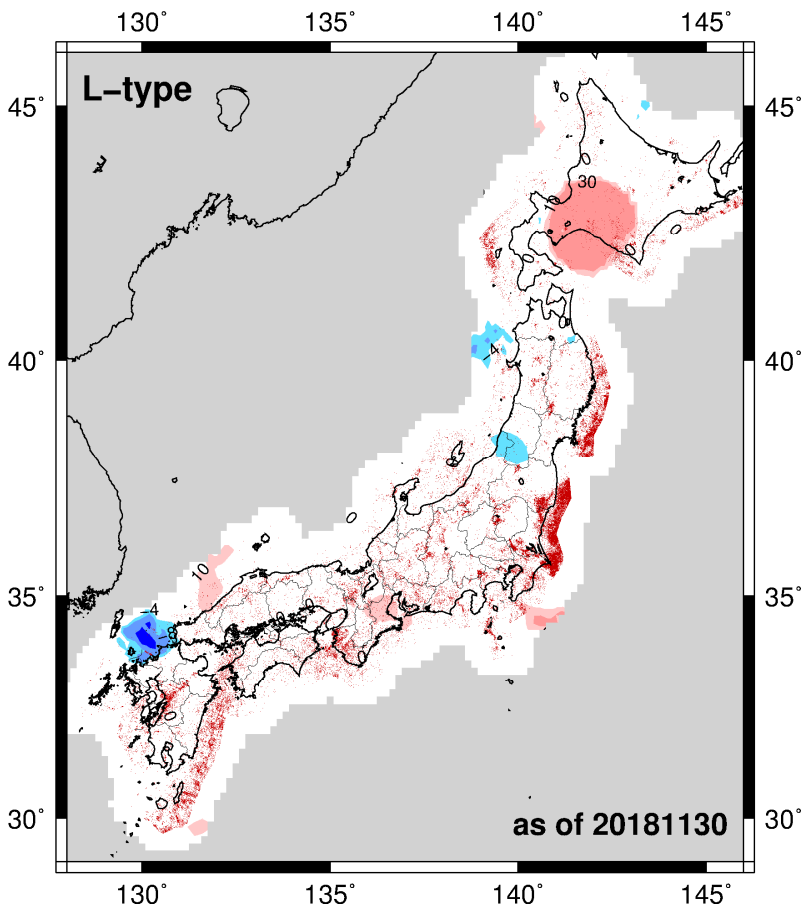
地下天気図解析では、経験則として地震活動の静穏化が終了してから地震が発生する事が多く、さ



九州の活断層 (政府地震調査委員会による)



らに静穏化の異常の縁辺部で地震が発生するケースが多く知られています。そのため、福岡県の北部は地下天気図解析でも、地震の規模別の発生頻度解析(b値解析と言います)でも異常が観察されており、これらの断層帯は日本の中でも地震発生の可能性が高い断層帯と言う事ができると思います。



11月30日時点の地下天気図(左)と前回報告した10月19日時点の地下天気図(右)。北海道の地震活動活発化は9月6日の胆振東部地震の影響。最も気になる異常は九州北部(福岡県およびその北方海域)の異常である事がわかる。九州北方の異常はまだ拡大(進行)している可能性がある。